

派遣者番号	30K22	氏名	福盛田 嘉子
研究主題 —副主題—	学級集団の特性に合わせた授業設計におけるミドルリーダーのかかわり —小学校社会科における協働省察と授業実践を通して—		
派遣先	早稲田大学教職大学院	担当教官	細谷 美明
所属校	北区立なでしこ小学校	校長	大田 裕子

キーワード：ミドルリーダー 授業設計力 QU調査 協働省察 「しかけ」論

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

全国連合小学校長会(2006)の調査によると、学級がうまく機能しない状態にある学級は、小学校全体の8.9%にのぼっていると報告されている。河村(2010)は、現場の多くの教員は目の前にいる児童の実態に応じてどのように学級経営を展開すればよいのかという方法論が見いだせないまま苦戦しているのではないかとしている。そこで、良好な学級集団の状態を成立させるために、授業設計からのアプローチに着目してみた。教員一人一人が確かな授業設計力を身に付け、学級集団の特性に合わせた授業を展開することにより、良好な学級集団の確立につながると考える。

しかし近年、団塊世代の退職に伴い、教員の年齢構成が大きく変化してきている。これまで、自然に行われてきたベテラン教員から若手教員への授業設計力の継承は先細りになることが警鐘されている。こうした状況下において、ミドルリーダーが意図的に協働的な関わりを行うことが重要と考える。

多様な教科の中でも、ベネッセ教育総合研究所の第5回学習指導基本調査の結果(2010)によると、指導の得意・苦手に関する調査に関して、「社会科の指導がどちらかという苦手」と答えた教員は53.4%と全体の半数を占める。さらに、教職経験年数20年以上の教員においても指導を苦手と感じる教員が48.1%おり、社会科への苦手意識は教員経験年数とは関係がないことが分かる。以上のような理由から、学級集団の特性を把握し、社会科における授業設計を若手教員とミドルリーダーが協働的に行うにはどのような方法が効果的かを明らかにしたいと考え、本研究主題を設定した。

## 2 研究の内容・研究の方法

### (1) 0JT 対象担任のクラスにおける学級集団の特性把握と授業設計における課題の把握

0JT 対象者は、都内公立小学校教職歴3年目のA教諭である。前年度11月に実施したQU調査と本年度5月に実施したQU調査を比較すると、本年度になって非承認群や学級生活不満足群に分類する児童が増加し、学習意欲が低下していることが明らかになった。以上のことから、0JT 対象学級において、「学習意欲の向上」が求められていることが明確となった。

A教諭に東京都教育委員会が示す授業力向上のための『授業力』自己診断シートを記入してもらおうと、「当てはまらない」と付けた項目に授業の振り返りや改善といった授業省察に関するものが多く見られた。ミドルリーダーとの協働的な関わりの中でA教諭の授業省察力を高めることができれば、PDCAサイクルのCheck(省察)の質だけでなく授業力全体も高めることができると考え、この点を最大の課題と捉えた。

### (2) 社会科における授業設計を協働的に行うための仮説

新保・長倉ら(2013)は授業実践におけるPDCAサイクルの実行性の課題として、PDCAサイクルの中でも、授業省察から再デザインの過程が各教師に委ねられ、他者の視点が入りにくいことを指摘している。そこで、授業省察から再デザインの過程の中に「協働省察」の時間を位置付け(図1)、研究の仮説を『ミドルリーダーとの協働的かかわりのもと、若手教員が授業省察から再デザインに至るまでの過程を確保できれば、学級集団に合わせた授業設計力の向上を図ることができる。』と設定した。

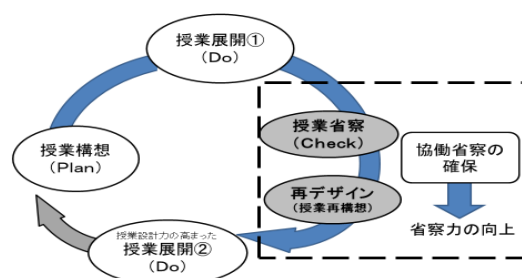


図1 協働省察の時間の位置づけ

### (3) 仮説を検証するための手だて

#### ①授業省察のための「視点」づくりとして課題としかけの共有を図る

授業省察のための「視点」づくりとして、鹿毛(2017)の「しかけ」論を基盤とし授業を構想する上で若手教員とミドルリーダーが課題を共有した上で「しかけ」となるツールや場を設定することとした。

#### ②若手教員が展開する授業をミドルリーダーが協働省察する機会を位置付ける

久我(2007)は「理論的な省察の過程は、『意識化』→『明確化』→『実践化』という体験の説明とこれに続く実践の改善の過程と言える。」と主張している。この理論を活用し、ミドルリーダーとして「協働省察」の際に以下のような関わり方を実施した。

ア 児童の姿をもとにした振り返りによる意識化  
イ 付箋を活用した省察を通して可視化を図る明確化  
ウ 次の授業や次の単元への再デザインを図る実践化

社会科小単元「郷土の発展に活かす～青山士～」(全11時間)の授業を若手教員が実施し毎時間の授業省察と再デザインをミドルリーダーが共有する。

### 3 研究の結果

#### (1)OJT対象A教諭の協働省察から再デザインしたことの実践化

協働省察から再デザインしたことの実践化のサイクルを積み重ねる中で、①社会的事象の再認識②「しかけ」の明確化と深化③暗黙知から形式知への転換といった点が確認された。

Schön(2007)は、「行為の中の知の生成」に気付き、「行為の中の省察」を通して言語化し、定型化を図ることにより、「暗黙知」を「知識」へと変遷させると述べている。

今回の実践においては、若手教員が直接的に言語化を図ることが難しい「暗黙知」としての捉えをミドルリーダーの専門的な知識を介して言語化し「形式知」と転換することにより、次時の授業において転移することができていた。

さらに、「協働省察」を通して、A教諭の社会的な見方・考え方が構築されたため、新たな視点で事象を見ることができている児童を見付けることにもつながった。

#### (2)協働省察が若手教員にもたらす効果の分析

「協働省察」を行う前の小単元後における「授業力」診断シートと「協働省察」を実施した小単元後における「授業力」診断

シートの変容が表1である。「協働省察」による効果として、児童の姿を基にした省察の実施による児童理解の深まりや社会科における困難の度合いが高い教材解釈・教材開発への授業力の向上が見られた。

	1回目	2回目
使命感、熱意、感性	2.0	3.4
児童・生徒理解	1.9	3.7
統率力	2.0	3.2
指導技術	2.3	2.6
教材開発、教材解釈	2.1	3.6
「指導と評価の計画」の作成・改善	1.9	3.4

表1 要素ごとの平均得点

### (3) 学級集団の変容の分析

検証授業後に行われたQU調査結果から、学級生活不満足群や侵害行為認知群が減少し、学級生活満足群の児童が増えた。A教諭からも、授業中における問題行動が減少したことや、社会科のみではなく、他の授業においても授業中に集中する児童が増えたという感想が述べられた。QUの調査結果からも、侵害行為認知群が減少し、ルールが守られるようになった様子が伺える。児童にとって楽しい授業が提供されたことにより学ぶ姿勢が高まったことが伺える。

### 4 研究の考察

今回、学級集団に合わせた授業設計におけるミドルリーダーの協働的な関わりとして、「協働省察」の価値を検証した。「協働省察」を行うことにより、そこで明確化した「しかけ」はその後の授業において若手教員による実践化につながることを示された。このことは、若手教員の授業設計力の深化へと発展することが考えられる。

また、児童の姿を通じた見取りは児童理解の深まりにつながり、「協働省察」を行った教科を超えて学級集団の変容に大きく影響することが伺えた。教職経験の浅い若手教員とともに、各教師の経験等の差異を生かし合い、教科等の専門性を有する教師を交えての省察から再デザインの過程を教師間で共有していくことで、更なる児童の成長や授業改善の課題・成果を発見することができるようになることが明確化した。

### 5 今後の展望

今後の課題は、他の若手教員における「協働省察」の実施による比較検討の在り方である。さらに、「協働省察」を行うミドルリーダーに求められる資質・能力に関しても明らかにしていかなければならない。